

# 第6章 城郭基盤造成

## 1. 城郭基盤造成計画のフロー

首里城は琉球石灰岩の急峻な丘陵地に築かれた城だが、城郭と一体となった往時の地形は、戦禍による破壊や戦後の土地利用の変化に伴う敷地造成によって大きく改変された。

首里城の歴史的風致の基盤となる地形について以下のフローにしたがい城郭基盤造成計画を行った。

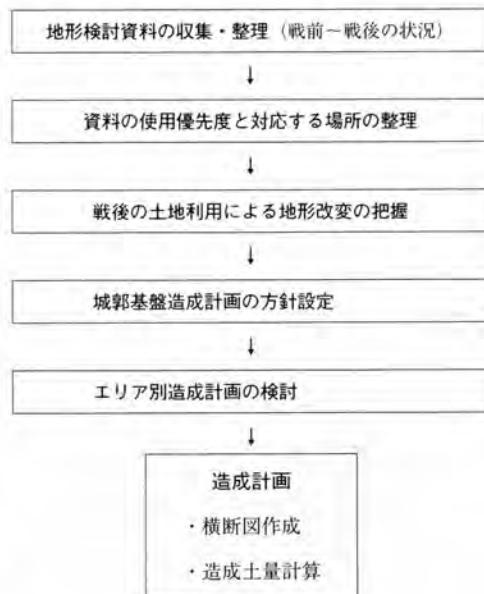


図-1 城郭基盤造成計画のフロー図

## 2. 首里城の地形に関する検討資料

琉球処分（沖縄県設置）以前の首里城の地形は、等高線の記入のない絵図などによって地形の盛り上がりを推測する程度に限られていた。琉球処分以後は以下に示す戦前と戦後の地形図に大別できる。

### 1) 明治初期「琉球那覇港及首里城間之図」（沖縄県立図書館蔵）

明治初期の首里城の状況を現わしている図面である。等高線が記入されているが、那覇港から首里城までの広域を対象としているため、首里城内の細部の地形を読み取れる精度の図面ではない。

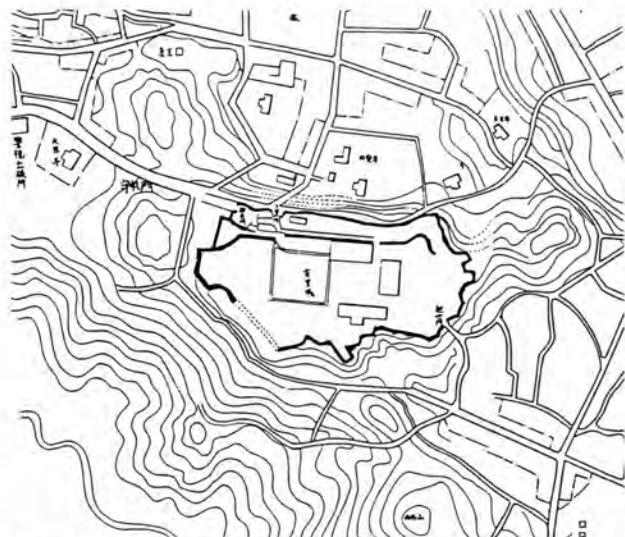


図-2 「琉球那覇港及首里城間之図」（トレース図）

### 2) 昭和6年頃「旧首里城図」（沖縄県立図書館蔵）

「旧首里城図」は阪谷良之進が昭和6年頃作成したもので、城郭の配置、建物と樹木の位置、地形の状況などの把握が可能である（資料編231ページ）。昭和62年の正殿跡遺構発掘調査によって基壇などの位置が確認されたが、この図面に記載されている位置とほぼ一致しており、歓会門・久慶門及び接続石積などの復元整備の際にも資料として利用された図面である。

この「旧首里城図」で描かれた状況は、米軍が戦争中に空中撮影した写真-1とほぼ同じと考えられる。



写真-1 破壊される直前の建物や城壁

### 3) 昭和25年頃 米軍作成の地形図

米軍が空中撮影を基に5フィート(1.524m)を単位として作成した地形図である。昭和25年5月に琉球大学は開学したが、写真-1はその当時の様子を伝えている。

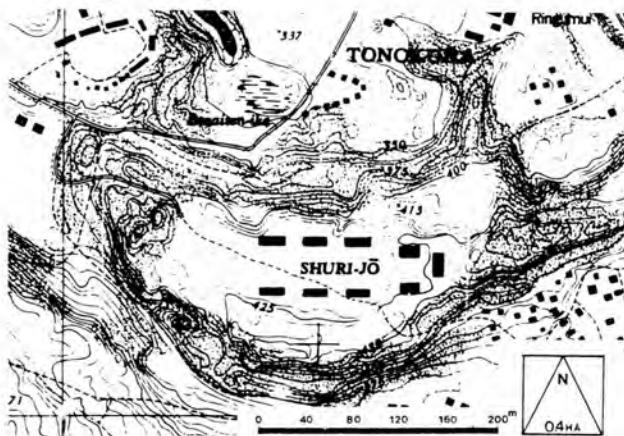


図-1 米軍作成の地形図



写真-1 開学当時の琉球大学

### 4) 昭和30年から47年にかけて行われた琉球大学の建物増築時点の設計図

建物の増築に伴って作成された設計図面で、配置図から計画前の地形の概要を把握することができる。

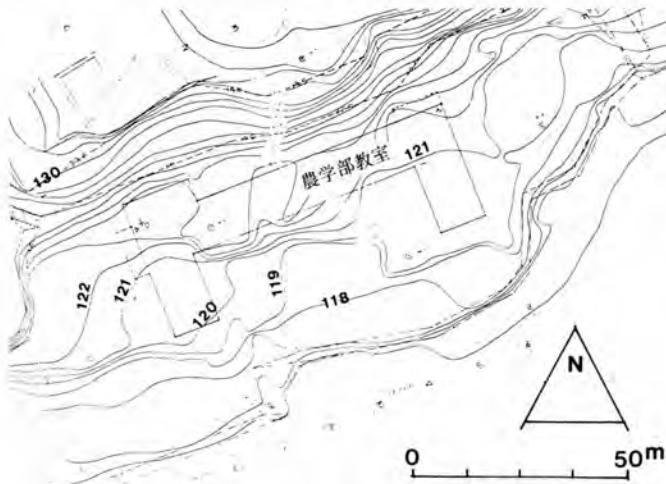


図-2 配置図

### 5) 昭和62年現在 現況図

琉球大学は昭和57年3月まで首里城跡地を大学キャンパスとして使用し、その後は西原町に移転した。この現況図は琉球大学の建物が撤去される以前の地形図で、写真-2はその状況を空中撮影したものである。

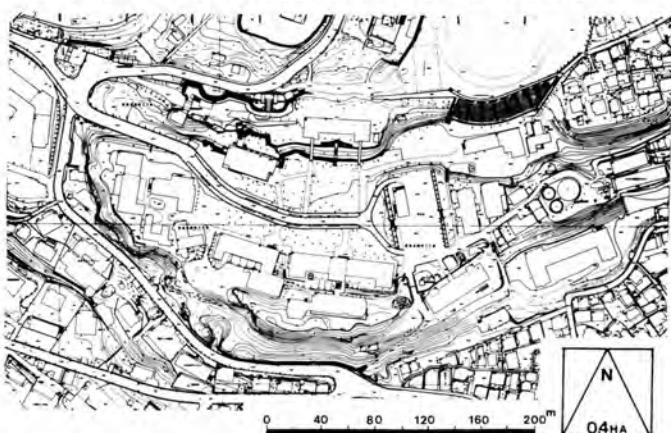


図-3 現況図



写真-2 航空写真（東側より見た計画地）

### 6) 発掘調査

久慶門内側一帯と正殿跡の発掘調査では、旧地盤や遺構、遺物が一部発掘されている。この調査の結果から、往時の地形や地盤高さなどが確認できる。

### 7) 首里城関連写真

正殿を中心とする御庭エリアの建物の基壇は、戦前の写真に数多く写されている。正殿の基壇の高さはすでに確認されていることから、その正殿の基壇の高さを基準に古写真から比率を算出して、他の建物の基壇の高さを想定することができる。

### 3. 検討資料と対応する場所の整理

既存の図面や写真などを資料として首里城の旧地形を検討することとし、その際の資料の使用優先度と対応する場所を以下のように順位設定した。

- ①旧地盤が発掘調査によって確認された場所
- ②復元整備が終了している場所（歓会門・久慶門周辺）
- ③正殿の基壇の高さを前提に写真から高さが想定できる場所（御庭エリア建物群周辺）
- ④戦前の首里城の地形状況を把握できる場所  
「旧首里城図」の等高線の間隔は、当時使用された尺貫法によって1間単位（約1.8m）で記入されていると想定できる。「旧首里城図」には等高線の高さの記入がないが、現況に往時の地形が残っている場所の高さや、他の地形図などから総合的に判断して等高線の高さの判読を試みた。
- ⑤米軍作成地形図から、建築工事によって改変を受ける前の地形に近いと考えられる場所
- ⑥琉球大学の建設工事によって改変される以前の地形状況を把握できる場所

以上の検討資料を敷地との対応から整理した図面が、図-1の地形検討資料総括図である。

### 4. 地形改変の検討

#### 1) 横断図による改変度の検討

米軍作成の地形図と昭和62年時点の現況図を重ね、20m間隔で横断図を作成し、改変状況を検討する。

#### 2) 城郭基盤の展開図による改変度の検討

城郭を米軍地形図と現況図に記入して、城郭の基盤高（地面に接する位置の標高）の展開図を作成する。各地盤線の高低差によって地形の改変度を検討する。

#### 3) 改変度の設定

前述した横断図と城郭基盤の展開図を基に高低差のランクを設定し、1950年（昭和25）と現況の地形の改変度を検討する。

改変度A（改変度小）：地盤差が1m未満の場合

改変度B（改変度中）：地盤差が1m以上で3m未満の場合

改変度C（改変度大）：地盤差が3m以上の場合

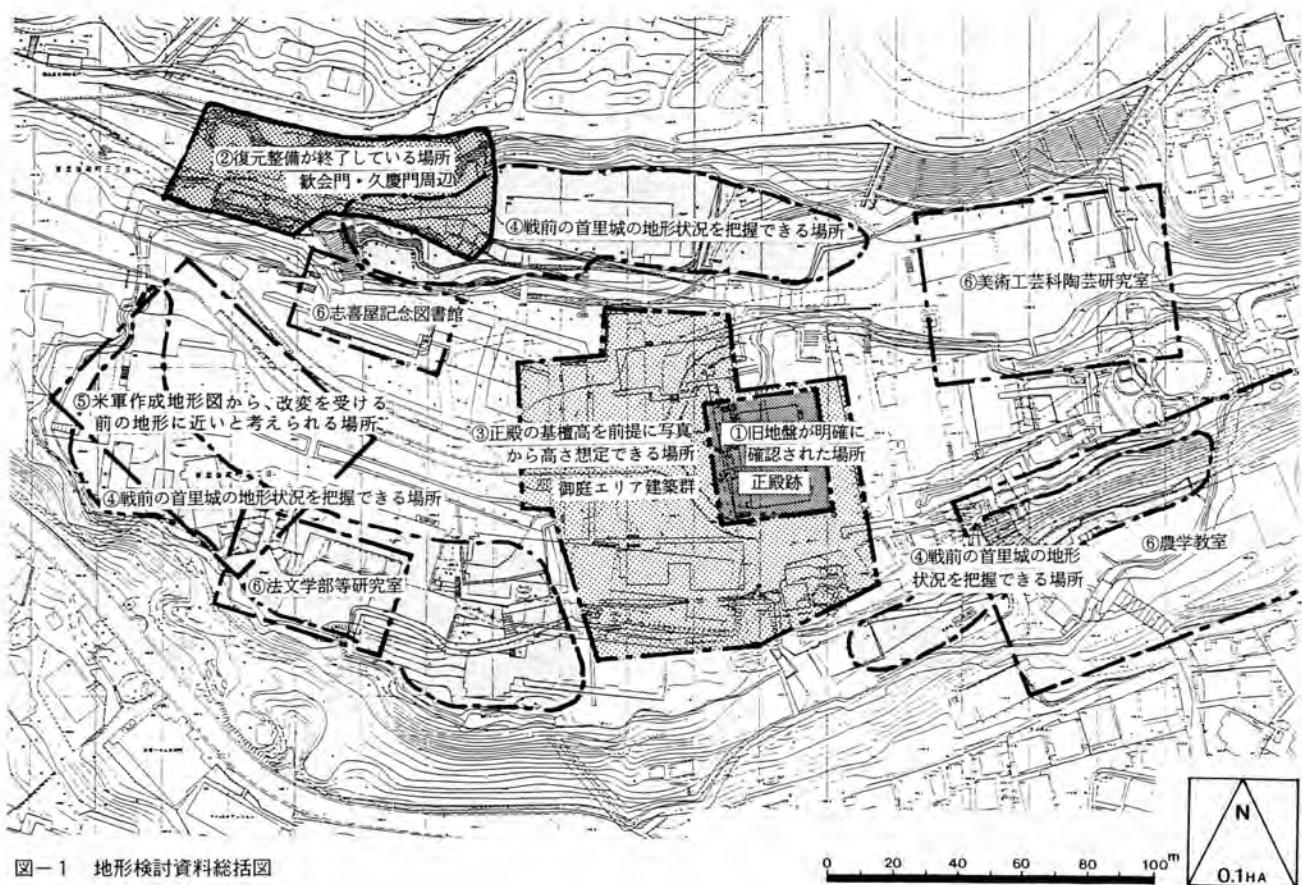


図-1 地形検討資料総括図

## 5. 造成計画の基本方針

基本計画では王府時代の土地利用状況の整理を行った上で、公園利用としてのエリア区分を行い、土地利用方針を設定した。

ここではこれらの土地利用方針を受け、造成計画の基本的な考え方を整理した。

- 1) 戦災で大きく改変された首里城は、地形・城郭・建造物等と一体となって、可能な限り往時の首里城のたたずまいを取り戻すことを基本とする。
- 2) 正殿跡の発掘調査で確認された5期にわたる基壇は極めて重要な歴史資料であり、復元整備に際しては旧地盤より約68cmかさ上げを行い、遺構を保存することとした。御庭とそこを取り囲む建物群は往時の歴史的空间構成を重視し、一体となって地盤高を設定する。
- 3) 歓会門から久慶門周辺は、発掘調査を基に旧地盤や遺構の確認によって復元整備が進められてきた。これに連続する瑞泉門・漏刻門を主体とした城門エリア西側部分は、旧地盤・遺構を確認した上で復元整備を行うこととする。
- 4) かさ上げを行う御庭エリアと旧地盤を踏襲する城門エリア西側部分は、関連する遺構の重要性を考慮し、歴史的空间構成や公園の利用運営などの視点から地盤調整を行う。
- 5) 京の内エリアは城内で最も重要な祭祀空間として機能していた。京の内は今後の発掘調査や関連する調査・研究を踏まえて、公園計画における位置

づけを明確にし、整備方針を定める。

- 6) 造成計画はできるかぎり往時の状況に近づけることを目標とするが、身障者用ルート、管理用車両進入ルートについては縦断勾配の基準を守り、これに合わせた園路造成を図る。
- 7) 琉球大学の建設工事で不自然に造成されて地形が3m以上の改変を受けたエリアは、修景に考慮して往時の地形に近づける事を目指す。
- 8) 勾配のついていない広場では、排水勾配を考慮した地盤高の設定を行う。

## 6. エリア別造成計画

[第1編 公園計画編] 第6章の土地利用計画(71ページ)の実現に向けて、造成計画の基本方針に基づき、以下の8エリアに区分して、造成計画を行った。

- ①西のアザナ周辺エリア
- ②瑞泉門・漏刻門周辺城門エリア
- ③京の内周辺エリア
- ④久慶門東城郭周辺エリア
- ⑤正殿・御庭エリア
- ⑥書院・二階殿・料理座周辺エリア
- ⑦北東城郭エリア
- ⑧継世門周辺エリア

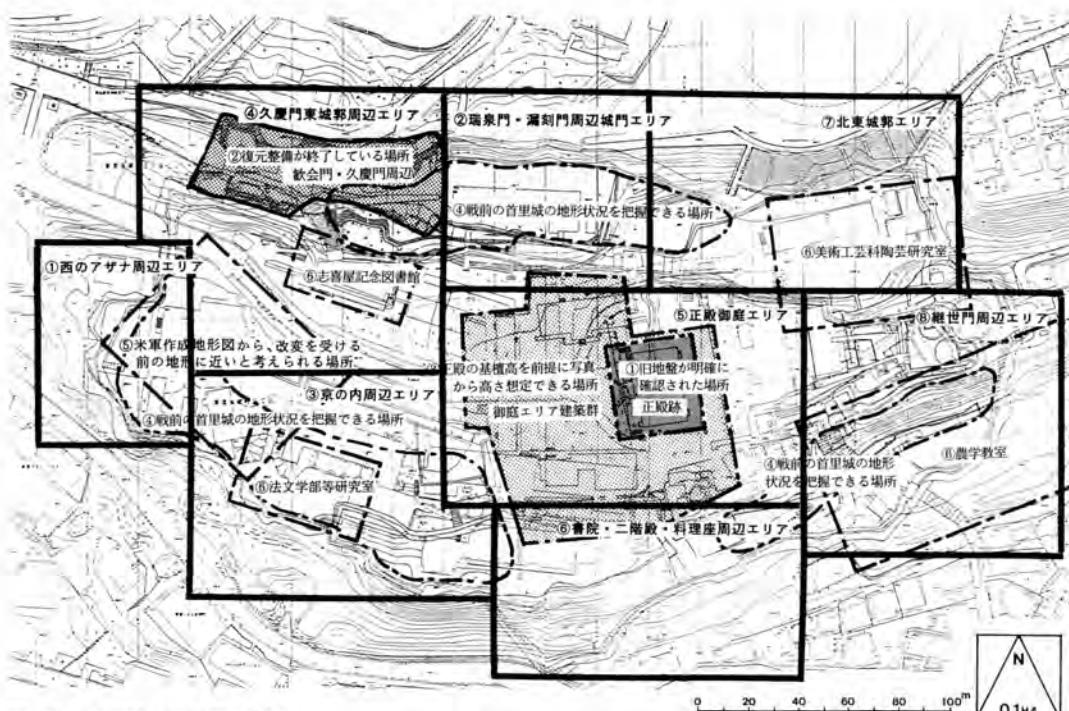
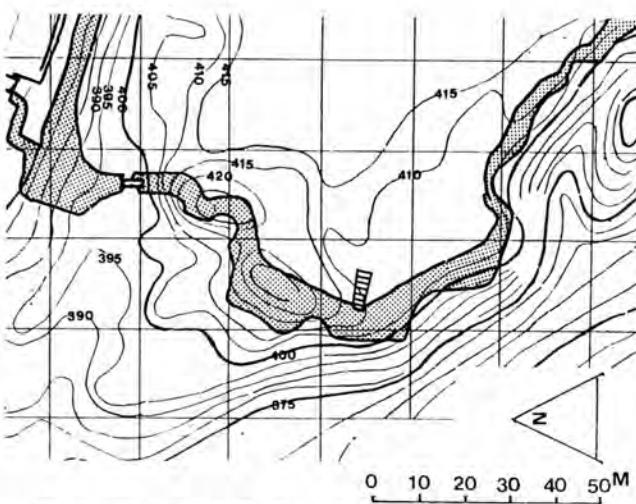
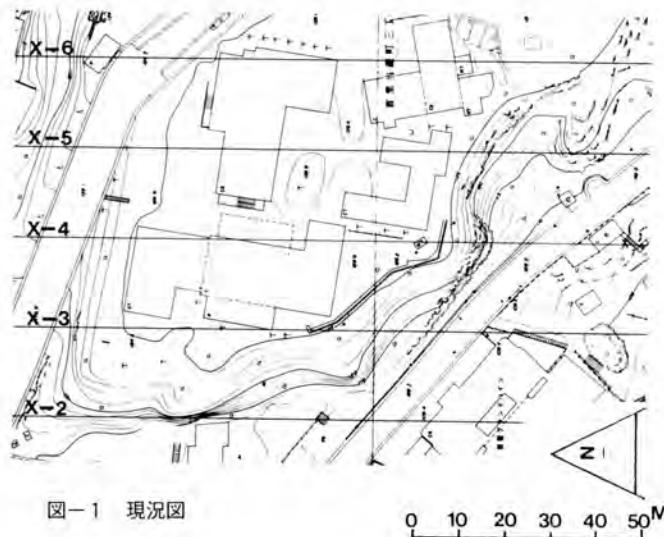


図-1 造成計画エリア位置図

## 1) 西のアザナ周辺エリア

(1)木曳門周辺の現況地盤高は標高122.1mあるが、米軍作成地形図では約120.3mになっている(図-2)。現況が高いのは琉球大学のアプローチ道路の工事によって盛土された結果と推測される。このアプローチ道路の一部が発掘調査されたが、旧地盤からかさあげされた状況が確認されている。木曳門の計画地盤高は米軍作成地形図を参考に120.5mに設定する。

(2)木曳門の地盤高120.5mを中心に門の前後の園路縦断勾配は12分の1を越えないものとし、園路沿いの造成地盤は園路にすりつける。



## 2) 瑞泉門・漏刻門周辺城門エリア

(1)発掘調査では、瑞泉門磴道の一部と漏刻門内側の石階段が確認された。瑞泉門磴道の下は、歓会門からの石畳工事で地盤高112.2mで整備が行われている。(図-3)

(2)漏刻門北側の斜面は「旧首里城図」(図-4)に高さの記入があり、発掘調査の結果と照らし合わせながら、等高線を111~116mに設定する。

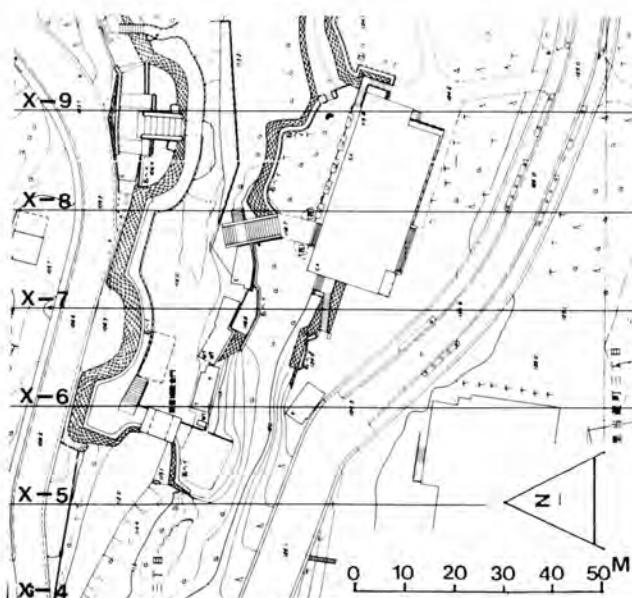


図-3 現況図

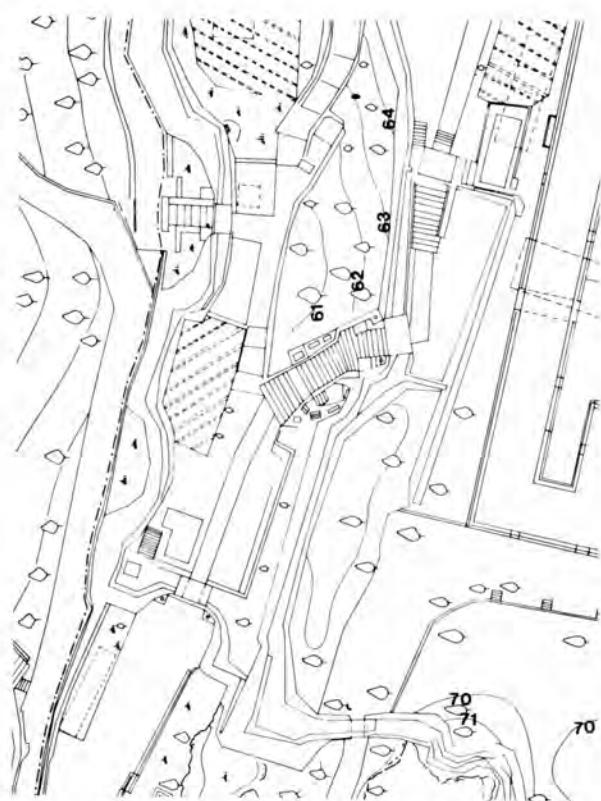


図-4 「旧首里城図」 単位：1間 (1.818m)

### 3) 京の内周辺エリア

- (1) 京の内物見周辺の現況は135m、西側に136mの等高線が入っているが、「旧首里城図」では75間(136.3m)の等高線が城郭沿いに入っている。現況は法文ビル建築工事によって切土されたと推測する。京の内周辺は人工的に切土された地形の修復を図ることとし、「旧首里城図」の高さを基準に地盤を設定する。
- (2) 「旧首里城図」は昭和6年頃の地形図面で、当時は下之御庭の南側に連続する京の内石積はすでに撤去され、小学校が建設されていた。京の内は幾列にも石積が連なり複雑な城郭を形成していた。地盤はこれらの石積と関連が強く、南から北に向かって徐々に地盤は下がっていたと推測する。

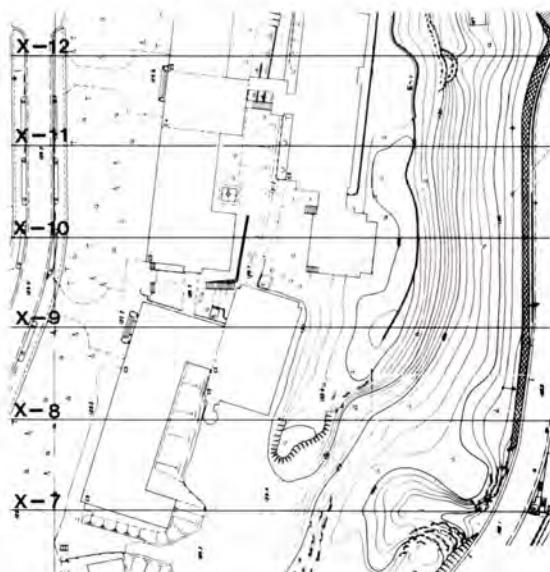
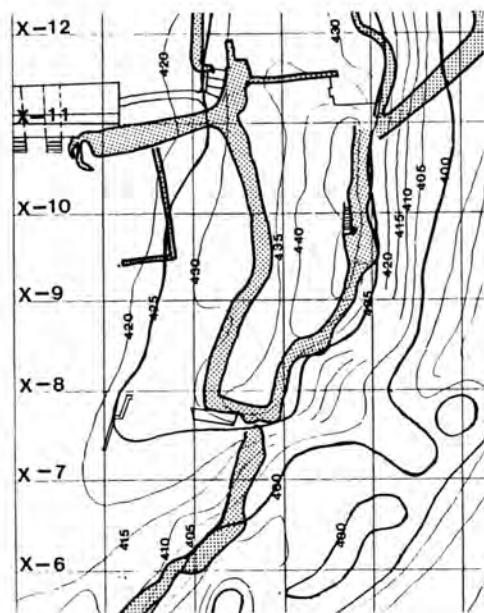


図-1 現況図



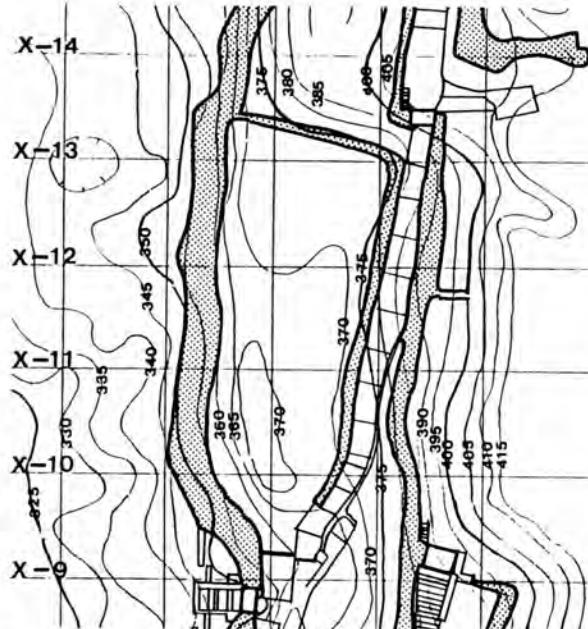


図-1 米軍作成地形図



図-2 「旧首里城図」

## 5) 正殿・御庭エリア

(1)正殿の発掘調査の結果から、正殿基壇と御庭の旧地盤高が判明した。各建物の規模や形態について古写真、図面、古文書などの資料を基に検討を行ったが、発掘調査によって明らかになった地盤高を基に御庭周辺の建物の基壇高さを設定した。

正殿基壇	旧地盤高	127.64 m
御庭	々	125.9 m
北殿基壇	々	126.6 m
南殿基壇	々	126.8 m
奉神門基壇	々	126.4 m
下之御庭	々	124.4~124.6 m

(2)旧地盤は、正殿基壇部分で約30cm、御庭部分で約70cm削りとられている。

(3)正殿の実施設計委員会では、正殿の基礎部分から発掘された5期にわたる基壇を保存するために、旧地盤よりも約68cmかさ上げすることを決定した。

#### (4)正殿・御庭エリアの地盤高設定の考え方

旧地盤より約68cmかさ上げする正殿・御庭エリアは次ページの図1、2の様に地盤設定を行う。

- ① 約68cmのかさ上げは、正殿・御庭を中心に、御庭を取り囲む基壇とその上に建つ北殿、南殿・番所、奉神門の各建物の範囲を原則とする。
  - ② 新旧地盤の調整は、南北方向は北殿の北石積、南殿の南石積で地盤差を解消する。東方向は、正殿東側の御内原の旧地盤にすりつけ、西方向は奉神門から下之御庭、漏刻門までの範囲で旧地盤にすりつける。
  - ③ 奉神門の石階段、基壇遺構はかさ上げにより保護を図る。
  - ④ 系図座・用物座とその周辺は遺構が確認されており、この一帯で正殿のかさ上げ高を解消して旧地盤を踏襲する。(次ページ 図-1左側)

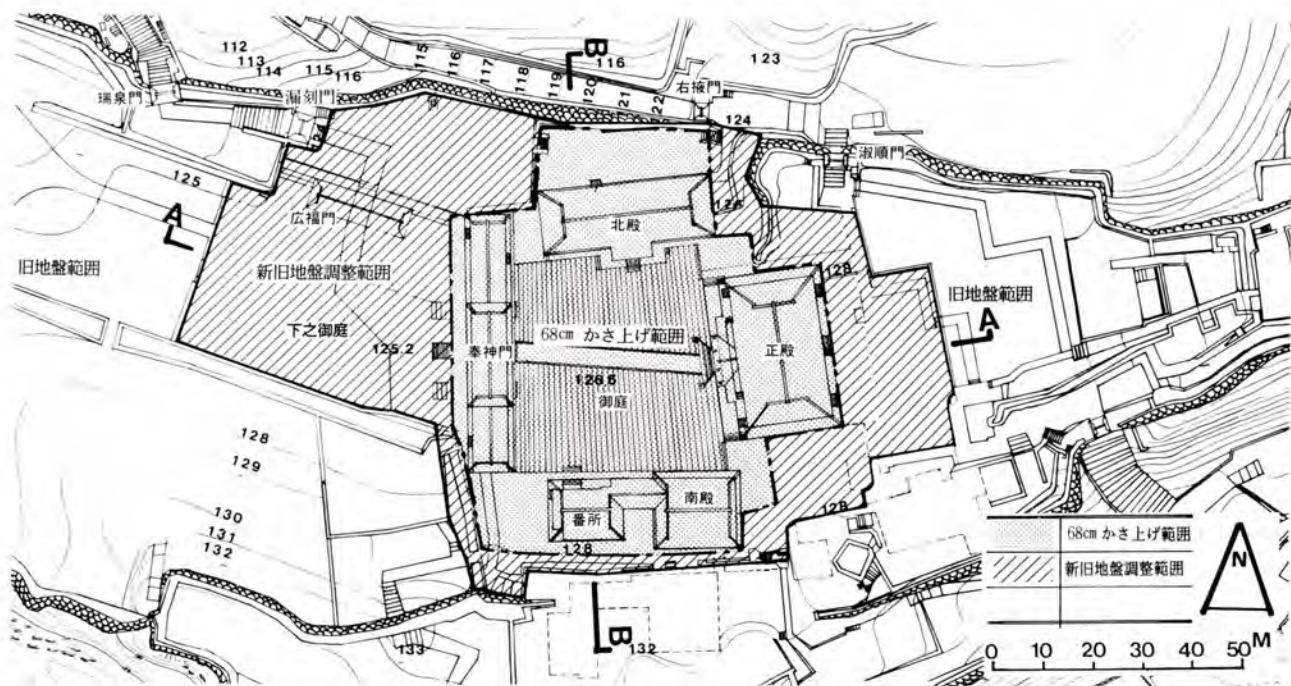


図-1 正殿・御庭エリア新旧地盤及び調整範囲想定図

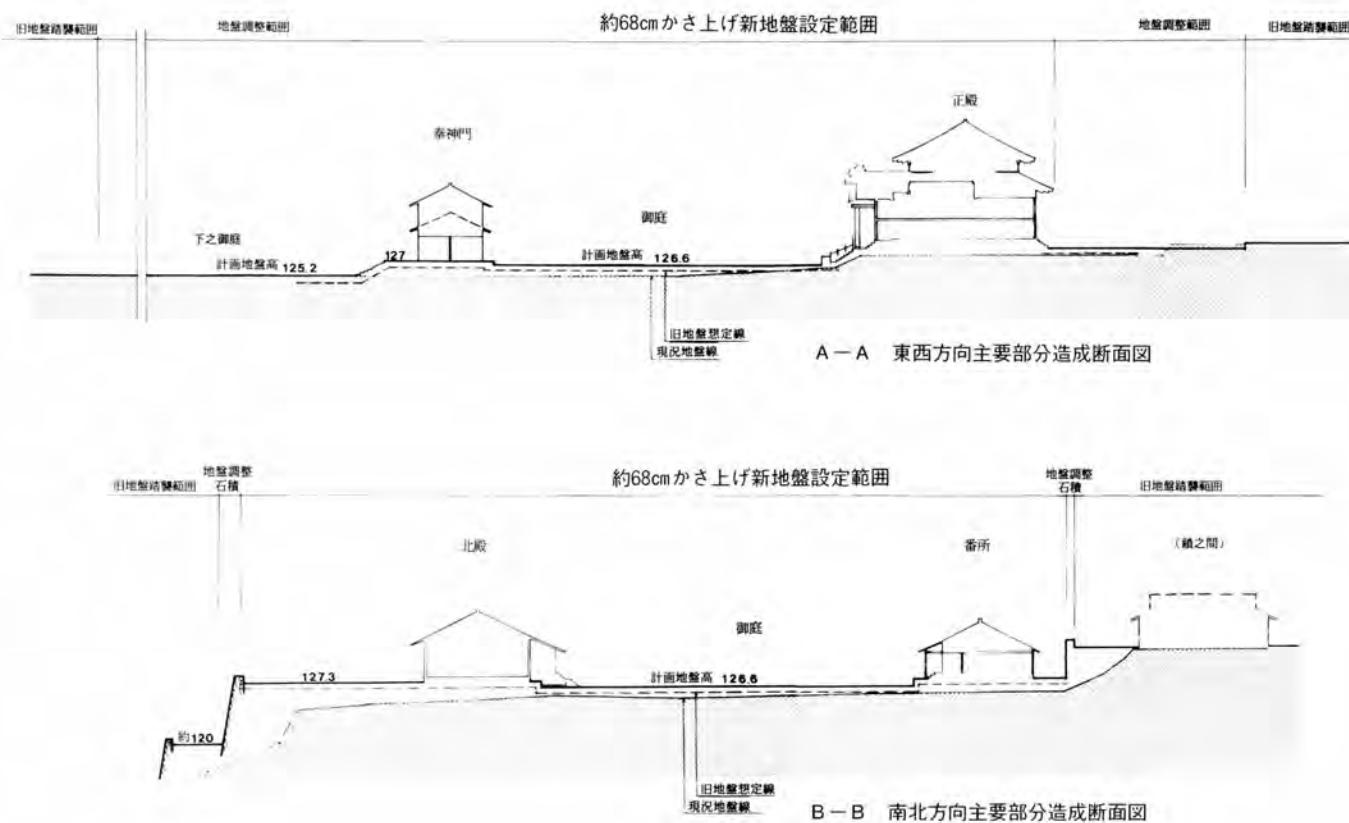


図-2 造成断面図

#### 6) 書院・二階殿・料理座周辺エリア

(1)書院・鎖之間の地盤高は、御庭エリアの地盤設定と関連して131mと設定し、御庭エリアの約68cmのかさ上げ地盤は南殿と書院の間にある石積で高さの調整を行う。

(2) 荘銘御嶽周辺は現況で位置が確認できる。この現況地盤は改変が見られないことから、地盤高130mと設定する。(図-1)

(3)料理座周辺は「旧首里城図」に等高線の記入があり、67~69間の高さの判読ができるので、122~127mに設定する。



図-1 現況図

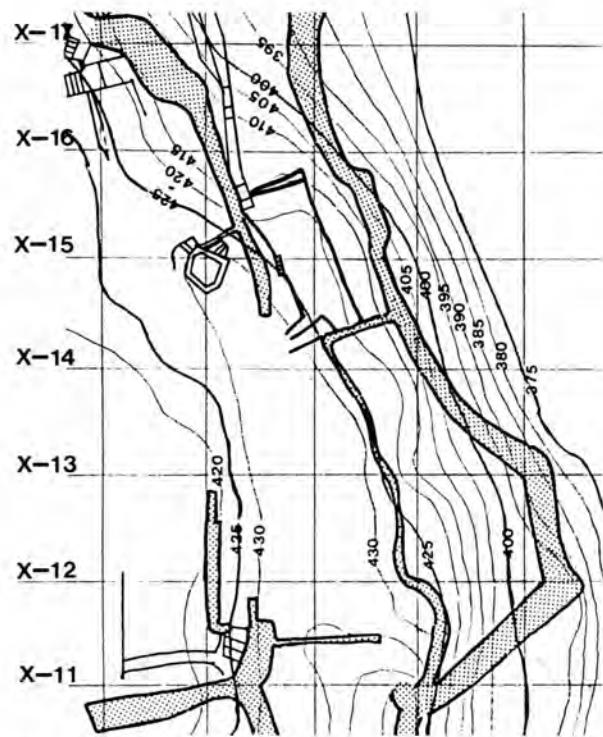


図-2 米軍作成地形図



図-3 「旧首里城図」

## 7) 北東城郭エリア

(1)城郭内の高さは「旧首里城図」や米軍作成地形図の等高線から、122～124mの高さにあり、現況の高さとほぼ一致する(図-4)。城郭沿いの高さは現況に合わせて123m前後に設定し、東のアザナ方向への地形の盛上がりは現況を考慮しながら米軍作成の地形図(次ページ 図-1)より、123～135mの高さを設定した。

(2) 淑順門の北の外郭部分は盛土によって地形改変を受けている。城郭内の地盤も盛土されているが、「旧首里城図」(次ページ 図-2) の等高線から66~68間 (119.9~123.6m) と判読できるので、120~123m の地盤高を設定した。

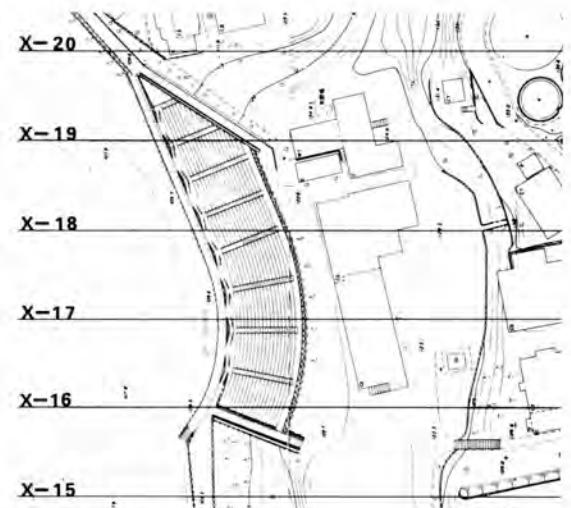


図-4 現況図

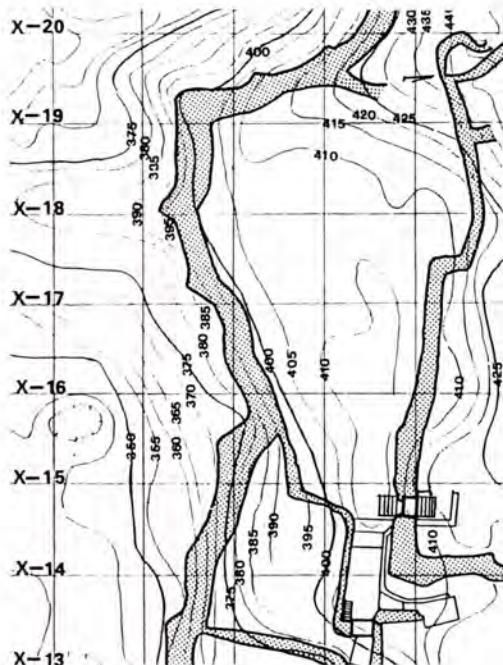


図-1 米軍作成地形図



図-2 「旧首里城図」

## 8) 繼世門周辺エリア

- (1) 繼世門の地盤高は、米軍作成地形図（図-4）が約118.5m、「旧首里城図」（図-5）の65間（118.2m）より少し高い表示であることから、118.5mに設定した。
- (2) 繼世門から美福門にかけては、「旧首里城図」の等高線から67~72間（121.8~130.8m）と判読して高さを設定した。

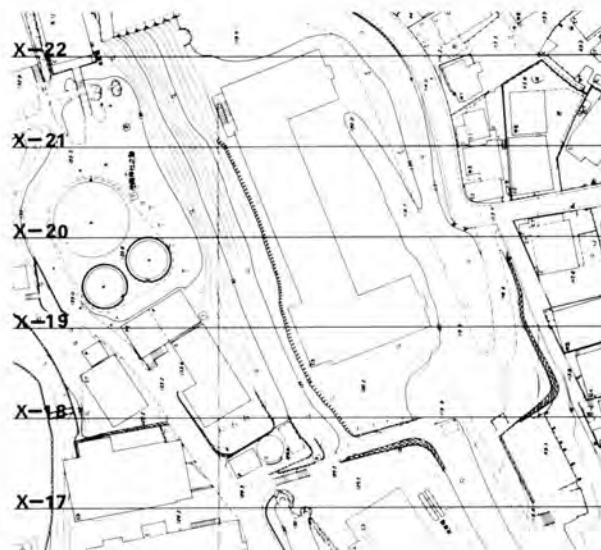


図-3 現況図

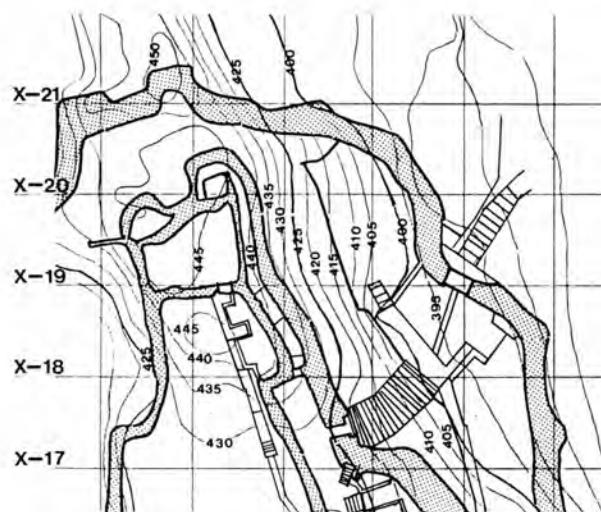


図-4 米軍作成地形図



図-5 「旧首里城図」

## 7. 全体の造成計画

各エリアの造成計画を基に、全体の造成計画図を作

成した(図-1)。さらに造成計画に伴う現況地盤面の切土・盛土のエリアを図化した(図-2)。

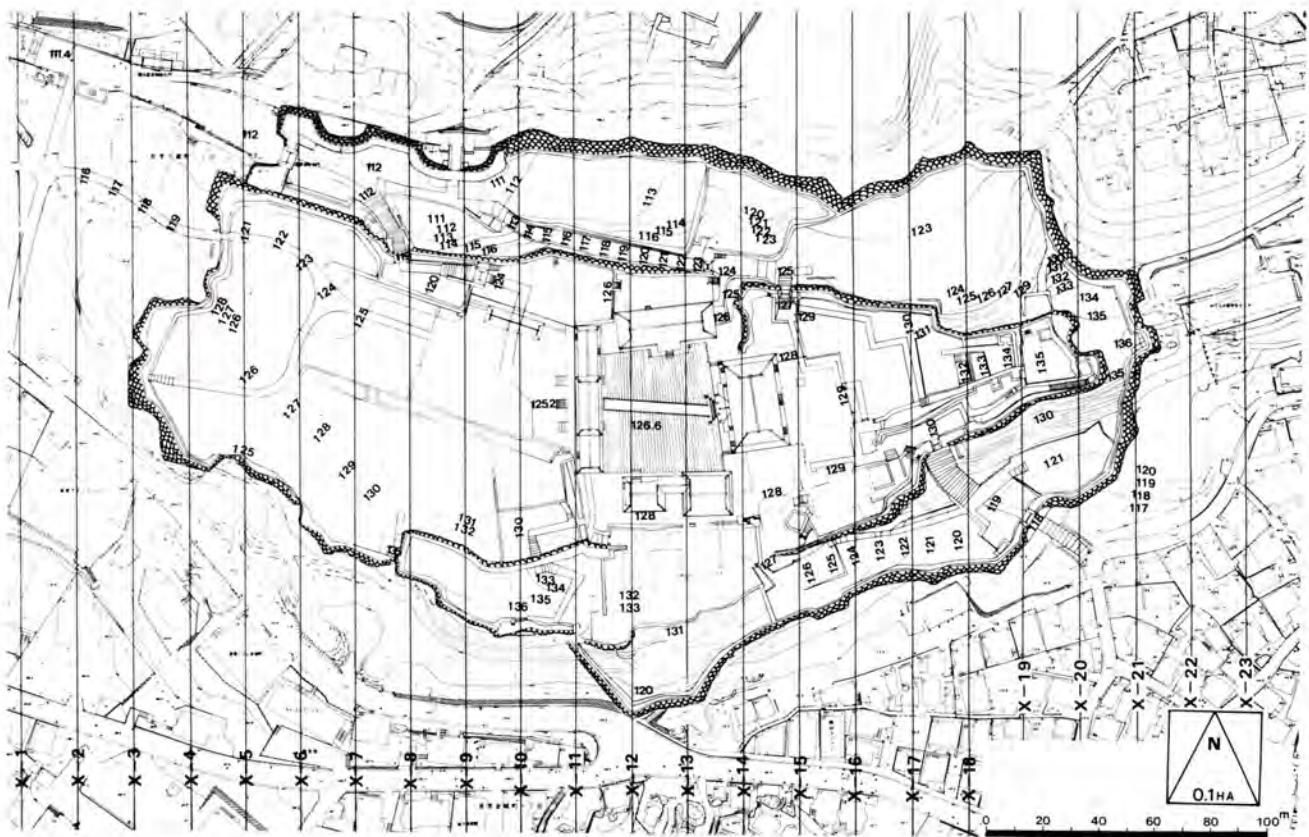


図-1 造成計画図

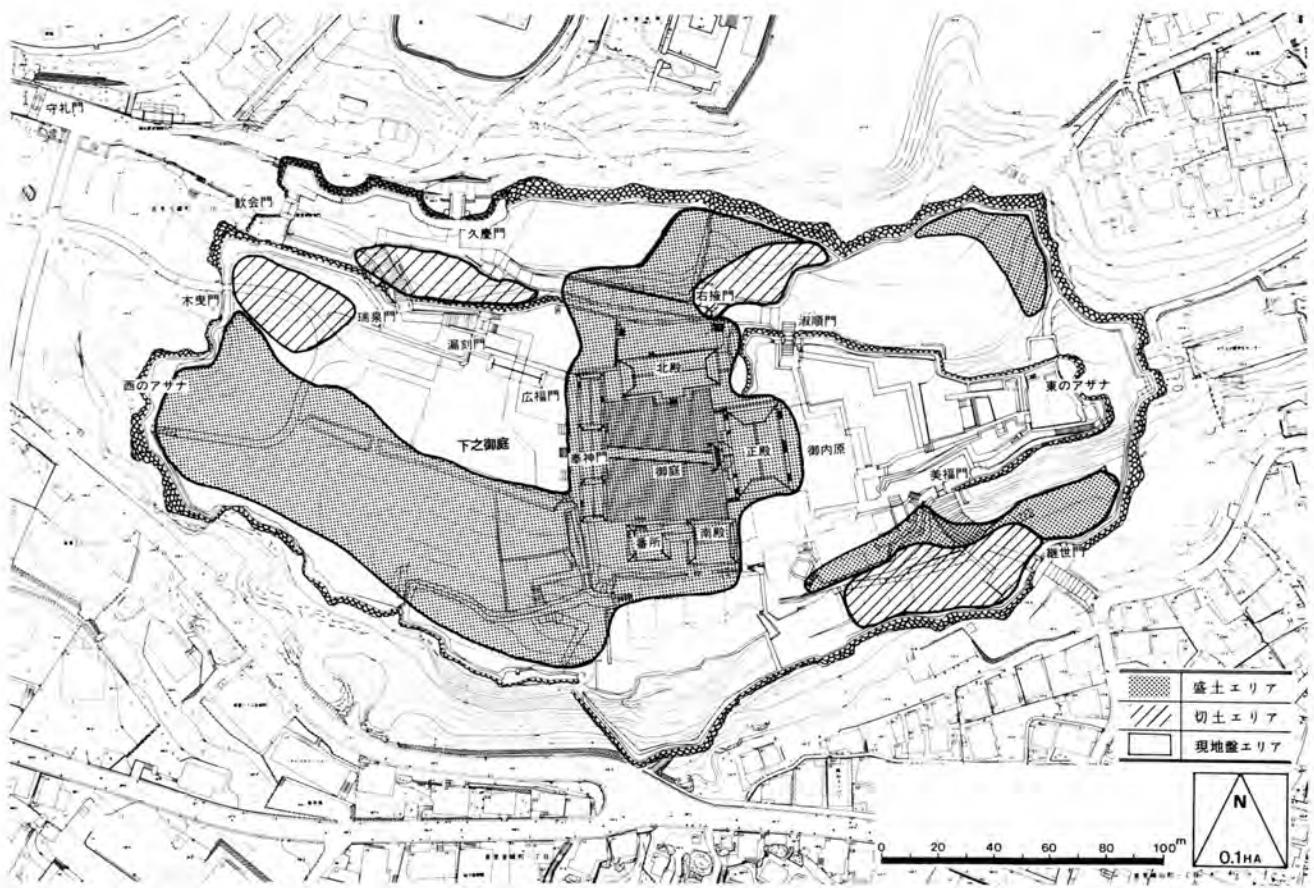


図-2 切土・盛土エリア平面図